

ディケンズの『互いの友』におけるテムズ河について

福島 光 義

外国語第2研究室

On the Thames in Dickens' *Our Mutual Friend*

Mitsuyoshi FUKUSHIMA

English

Abstract

This paper analyzes from a modern perspective the relationship between Victorian man and society, as depicted by Charles Dickens in *Our Mutual Friend* (1865). It focuses on the relationship between Londoners and the River Thames, as portrayed by Dickens and other contemporary journalists and poets. Finally, it discusses the symbolism of the river and the water, specifically, the death of the old self and subsequent rebirth into a new identity.

要 旨

本論文の狙いは、19世紀に生きた小説家チャールズ・ディケンズの目を通して描かれ提供される、人間と社会の諸問題について、現代的な視点に立って捉え直すことである。その際、特に人々とテムズ河との関わりを重視して論じている。従って、こういった問題—例えば、死と再生、新たなアイデンティティの獲得、など川のもつ象徴的意味、愛と金—を扱うのに最も適した作品は、『互いの友』(1865)である。しかし、本論文は、このテーマを論ずるのにふさわしい他のディケンズの作品や、彼と同じヴィクトリア朝時代のジャーナリストや詩人の作品も取り上げている。

I

Charles Dickens (1812-70) の初期の傑作 *Pickwick Papers* (1837) 第10章で、主人公 Mr. Pickwick

が、後に彼の従者となる Sam (uel Weller) に初めて出会ったのは、「白雄鹿亭」(White Hart) と呼ばれる public house である。Sam はここで靴磨き人 (boots) として働いているが、他の使用人や客たちとのウィットに富む応対振りにはただただ感心させられるばかりである。話しが進むにつれ、次第に明らかになるが、当意即妙の機智、奇抜な警句、難局に当っての臨機応変の才、他の人々からの高い信用、などで形容されるこの人物の登場で作品は俄然面白くなり、生き生きしてくる。この二人が偶然に出会った「白雄鹿亭」はテムズ河の南岸サザック (Southwark) にある。

Dickens の幾つかの作品において、小説の舞台としてテムズ河、或いは前述した *Pickwick Papers* の例のようにテムズ河近辺が選ばれている。ディケンズの作品における川は単なる背景としてばかりでなく、人間の生死の鍵を握り、再生ないし復活の象徴的意味を持つなど重要な役割を果たす。又ディケンズのテムズ河岸で暮らす人々のリアリスティックな描写は、ディケンズと同時代の Henry Mayhew (1812-87) のジャーナリスト独特の距離感と具体性をもって詳細に記述された、ルポ記事のなかの当時の最下層の人々の実態と符合する。しかし、ディケンズは、こういった下層乃至最下層の人々を、貧富の差から来る矛盾の犠牲者としてよりも、むしろ生活者としての知恵とエネルギーをもつ魅力的な人間として小説の中に取り込み、生き生きと劇的に描き出す。

本論の狙いは、19世紀に生きた小説家チャールズ・ディケンズの目を通して描かれ提供される、人間と社会の諸問題についての情報を、現代的な視点に立って捉え直すことである。その際、特に人々とテムズ河との関わりを重視して論ずる予定である。従って、こういった問題を扱うのに最もふさわしい作品は、ディケンズの *Our Mutual Friend* (『互いの友』) (1865) といっても過言ではあるまい。テムズ河との関係が深いその他のディケンズの作品には、*Oliver Twist* (1838)、*The Curiosity Shop* (1857)、*Martin Chuzzlewit* (1844)、*David Copperfield* (1850)、*Little Dorrit* (1857)、*Great Expectations* (1861)、それに *The Mystery of Edwin Drood* (1870) などがある。同じヴィクトリア朝時代の詩人 Thomas Hood (1799-1845) の作品 “The Bridge of Sighs” (1844) も人とテムズ河との関係について謳っている。そこで、本論文では、人間とテムズ河(水)との関係を、『互いの友』を中心に、出来る限り他の作品にも言及しながら論じて行く予定である。

II

Michael & Mollie Hardwick が、*Dickens's England* (1970) で、「ロンドンの大河 (テムズ河) は他のどの作品の中より、強力にこの作品の中を流れている。」⁽¹⁾ と指摘しているように、『互いの友』という小説はテムズ河抜きには語れない。この小説からは、テムズ河のうねりや波の音が伝わってくるほどである。H. M. Daleski が、本作品のことを、「ディケンズの小説の中で最も詩的なものであり、そして *Wuthering Heights* と同じように一その帰属すべき所は詩的ドラマにある」⁽²⁾ と指摘している通り、テムズ河上で幕が開くこの物語の冒頭は、テムズ河と人間との関わりでの劇的な展開を暗示する。

『互いの友』第1巻第1章は、秋の夕暮れが迫るころ、汚れて胡散臭い外観の小舟が、二人の人物を乗せて、鉄製の Southwark Bridge と石で造られた London Bridge との間(すぐ下流にはロンドン塔がある)のテムズ河に浮かんでいたという情景描写から始まる。

In these times of ours, though concerning the exact year there is no need to be precise, a boat of dirty and disreputable appearance, with two figures in it, floated on the Thames, between Southwark Bridge which is of iron, and London Bridge which is of stone, as an autumn evening was closing in. (*Our Mutual Friend* (以下 *OMF* と省略) Bk. I, chap. 1)

この二人とは、テムズ河を往来する船からこぼれ落ちる物を拾い上げたり、時には死体を引き上げたり、金目のものをすくい上げたりして生計を立てている Gaffer Hexam とその娘 Lizzie である。この職業は、メイヒューの言ういわゆる「さらい屋」である。

ここで「さらい屋」なる当時実在した仕事とは、どのようなものであったのか少し説明しておこう。小舟一艘と底引き網が頼りの「さらい屋」は漁師兼私設浚渫業者で、石炭など船からこぼれ落ちる物を浚っていた。時には水死体を引き上げることもある。ガヴィン・ウエイトマンは、メイヒューの著作『ロンドンの労働とロンドンの貧民』から、「さらい屋は旧ロンドン橋から身を取り出して誤まって河に落ちた土左右衛門を回収しては日銭を得ていたテムズ河の漁師の末裔ではないか」⁽³⁾ という箇所を引いている。古いロンドン橋の橋脚周辺は水の流れが早く、時々水難事故が起き船が転覆し貴重品や時には人命まで失われ、その捜索に懸賞金が出され、ここぞまさにさらい屋の出番というわけで、運よく懸賞金にありつければしばらく左うちわで暮らせたい。懸賞金がなくても、川底から拾い上げたものは何でも自分のものになるし、身許不明の水死体を引き上げても、水上警察へ届けば5シリングの褒美がもらえ、しかもその前に金目のものはちゃっかり頂戴してしまふことができたようである。⁽⁴⁾

さて話しを川の舟の二人に戻そう。獲物を狙う「猛禽」(bird of prey) のような「さらい屋」の父親と船を漕ぐのも手慣れた感じの娘は熱心に川をみつめている。特に父親は川面のあらゆる小さな早瀬や渦を見つめ、そこから何かを探そうとしている。川面から何かについての情報を得ようとしている。しかし娘は川面と父親の顔の両方を熱心に見つめているが、怯えと恐怖の表情を浮かべている。

The figures in this boat were those of a strong man with ragged grizzled hair and a sun-browned face, and a dark girl of nineteen or twenty, sufficiently like him to be recognizable as his daughter. The girl rowed, pulling a pair of sculls very easily; the man, with the rudder-lines slack in his hands, and his hands loose in his waistband, kept an eager look-out. . . . The tide, which had turned an hour before, was running down, and his eyes watched every little race and eddy in its broad sweep, as the boat made slight headway against it, or drove

stern foremost before it, according as he directed his daughter by a movement of his head. She watched his face as earnestly as she watched the river. But, in the intensity of her look there was a touch of dread or horror. (*OMF* Bk. I, chap. 1)

この場面を含む第一章は、作品の構造上でもテーマ上でも、後続の章と緊密な結び付きを有している。娘の Lizzie は、沈みかける太陽の斜光が舟底にさしこみ、物に包まれた人間の形にどこか似た腐食部分に達して、あたかも血を薄めたような色でそこを染めているの見て、ゾツとして震える。

But, it happened now, that a slant of light from the setting sun glanced into the bottom of the boat, and, touching a rotten stain there which bore some resemblance to the outline of a muffled human form, coloured it as though with diluted blood. This caught the girl's eye, and she shivered. (*OMF* Bk. I, chap. 1)

この不吉な場面は、Harmon を中心としたプロットと Wrayburn を中心としたプロットと直接的間接的に関係する。つまり、この記述は、すぐ後の Gaffer による川に浮く死体発見につながる。更にこの死体は、莫大な財産を相続するはずの John Harmon ではないかと思われる（実際は彼ではなく、彼の衣服を身につけていたがために、彼ではないかと誤解された別人の死体）。又この場面は第 4 巻第 6 章で Lizzie が、暴漢に襲われ川に落ちて流されていく血だらけの Eugene Wrayburn の事件を予兆する。

溺死体は本章だけに止まらず、次々と登場してくる。Wrayburn の様な溺死寸前の状態から蘇生することを含めて考えると、テムズ河は死体の引き受け場所であると同時に、生き返るための場、即ち、死と復活・再生の象徴的な場としての意味を帯びてくる。本章で、Gaffer が真剣なまなざしで狙っている獲物は、川さらい業者が通常手に入れる川にこぼれ落ちた石炭類ではなく、死体と死体についているお金そのものである。彼は死体から金を失敬するわけであるが、彼の理屈はこうである。死者にお金が何の役にたつ、生きてこの世の人間にとってこそ意味のあるものである、と。

'... Has a dead man any use for money? Is it possible for a dead man to have money? What world does a dead man belong to? T'other world. What world does money belong to? This world. How can money be a corpse's? Can a corpse own it, want it, spend it, claim it, miss it?

Don't try to go confounding the rights and wrongs of things' (*OMF* Bk. I, chap. 1)

19世紀ヴィクトリア朝にはびこった拝金主義に対する皮肉と読むのは行き過ぎであろうか。

そもそも『互いの友』の、主として Harmon プロットと関係するメインテーマはゴミの山と金と人

間との相関関係である。故 Harmon は、ロンドンという大都市のゴミ請負業者として巨万の富を築き上げる。ゴミといっても馬鹿にはできず、捨てたものではない。この小説のなかで、遺産の相続人である息子 John が行方不明のままなので、故 Harmon の「ゴミの山」を受け継いで大富豪になった Nicodemus Boffin という男の夢のような話がでてくるが、これは単なる絵空事ではない。彼は“The Golden Dustman”（「黄金のゴミ屋」）と呼ばれる。ロンドン中から集められたゴミが何故金になるのか。⁽⁵⁾ 作者の作り話ではなく、史実なのである。1851年当時、ロンドンで年間約40万トンの石炭殻が排出され、約90軒ある請負業者がそれらを荷馬車と人夫を使って集めた。集められたゴミはふるいにかけて、ふるい落とされた「土壌」は、肥料や煉瓦の材料として高値で売れた。次にやや荒い燃え殻は煉瓦を焼くための燃料となる。また中に混じっているポロぎれや骨類、金属類などは、船舶用具製造業者に、空きカンや古鉄類は、トランクのとめ金や硫酸鉄の製造業者に、古煉瓦、かき殻などは建設業者に、さらには古靴類は染料製造業者にというふうに、ほとんどの物の売れ行き先が決まっていたのである。時には現金や宝石類まで入っていて思わぬ儲けとなることもあった。リサイクルをしながら、思わぬ余禄もあったわけである。ここにゴミ＝黄金という図式が成り立つのである。これら金に化けるゴミの山を、Boffin なる幸運者が引き継いだのである。

この小説におけるもうひとつの大きな主題はこの「ごみの山」であり、これは上述したように史実ではあるが、人間性を喪失した拝金主義社会の実体を象徴している、という読みも可能である。ところで、テムズ河とごみの山はこの小説における重要な二つの主題であるが、互いに関連性はないのだろうか。実は、両者は無縁に存在するのではなく、多くの類似点や一致点がある。⁽⁶⁾ 例えば、老 Harmon がごみの山から掘出し物を見つけだし、莫大な富を築き上げたことは、Gaffer がテムズ河の水面を見つめることで、水面の渦や潮の流れから水面下の情報を読み取り、水中から金目のものを引出し、金を得たことと重なる。つまり、「テムズ川とごみの山はじつは同じ構造を持っているのであって、テムズ川は水中にごみの山を内包」⁽⁷⁾ しているのである。川底の泥は、ごみの山の類推的イメージをもっている点で結び付く。

ところで、第1章で、John Harmon ではないかと思われた死体は、実は George Radfoot なる悪党である事が判明する。この男は、John に毒薬を飲ませて気を失わせ、そのとき奪った彼の服を着たまま、また別の何者かによって殺害され、やはり川に投げ込まれたのである。それ故、John が死んだと思われたのである。しかし、John も実際殺されかけ、何とか生き返ったのである。しかし、彼は、John Harmon としてではなく、一時は Julius Handford として、次には John Rokesmith という人物となって登場する。

話はやや込み入っているが、John Rokesmith は、正体を隠して Boffin の秘書として働き、Wilfer 一家と知り合いになる。Wilfer には Bella という娘がおり、実は父親の Harmon が息子の許婚にする決めていた女性なのである。ところが、息子は父親の意に沿わず、追放される身となっていたのである。幸い、別人となって、Boffin の養女となっていたこの女性の本性を見定めることになる。この小説のタイトルに使われている“our mutual friend”（「共通の友」）とは、実は、Wilfer と Boffin 双

方にとっての共通の友 John Rokesmith のことなのである。

この Bella なる女性、貧乏生活には嫌気がさし、世の常で、お金が全てだなどと半ば自棄気味になっている。そこで Boffin は一計を案じ醜い守銭奴の役を買って出る。彼女にとっては一種のショック療法になり、生まれ変わる契機となる。彼女が生まれ変わる頃、John Rokesmith も Harmon として蘇ることになる。二人とも蘇るには、それなりの試練に耐える必要があった。テムズ河での John の疑似的な死は、「新たな自己への生まれ変わり」⁽⁸⁾ (rebirth into a new identity) にとって必要な「一種の浸礼」⁽⁹⁾ (a sort of baptismal immersion) であったのである。

John Harmon と同じように、Eugene Wrayburn にとっても、川は「新たな自己への生まれ変わり」のための「浸礼」の意味をもつ。Eugene は、社交界に出入りしながら、自己の帰属すべき場所を見い出せず、“If there is a word in the dictionary under any letter A to Z that I abominate, it is energy.” (OMF Bk. I, chap. 3) などと嘯き、活力を軽蔑し、折角の法廷弁護士の仕事もせず、怠惰と倦怠の日々を過ごしている。しかし、第1章での溺死体の事件を契機に、Lizzie Hexam に出会い彼女に関心を示すようになり、このことは、かねてより彼女に心を寄せている「貧民学校」教師 Bradley Headstone (名前からして、blood や墓石などを連想させ、不吉な狂暴さを思わせる) との因縁めいた出会いを招くことになる。Headstone は Eugene とは全く対照的な、刻苦勉励型の自らの力で教師の地位を得た、“meritocracy” (「実力主義社会」) の典型的な人間である。そんな彼が、恋敵である Eugene に対し人一倍の嫉妬を覚えるのは当然である。結局 Headstone による Eugene 襲撃という悲劇的な結果を引き起こす。実際は仮死状態であるが、Eugene は過去の自己の死を迎えることになる。つまり川での死は精神的再生の為の洗礼の意味をもつことになる。その手助けとなるのが、Lizzie というわけである。

第1章の小見出し ‘On the Look Out’ が示す通り、殆ど Gaffer と Lizzie に関するものであるが、見つめることを表わす表現が目立つ。Gaffer の視線は主に死体を漁るために向けられているが、父親の為に舟を漕いでいる娘の視線は、父親と川の流れに向けられている。二人は川を熟知し、仕事に熟練している。後の章で、Lizzie はこの観察力と舟を漕ぐ技のお陰で、瀕死の Eugene を救出することができる。世間体の悪い仕事の手伝いによって得た技術を生かすことができることへの彼女の感謝の念と、救出に向かう時の手際よさとが、つまり彼女の内面と彼女を外から見た姿とが、一人称から三人称への急速な変換という手法によって、次のように描写されている。(Lizzie が夜の静寂の中で、殴打する音とかすかな呻き声と川に何か落ちる音を聞きつけ、勇敢にもその音が聞こえた方へ向かい、川岸から月の光に向けられ、漂い流れていく Eugene の血まみれの顔を見つける、それに続く場面である。)

Now, merciful Heaven be thanked for that old time, and grant, O Blessed Lord, that through thy wonderings it may turn to good at last! To whomsoever the drifting face belongs, be it man's or woman's, help my humble hands, Lord God, to raise it from death and restore

it to some one to whom it must be dear!

It was thought, fervently thought, but not for a moment did the prayer check her. She was away before it welled up in her mind, away, swift and true, yet steady above all--for without steadiness it could never be done--to the landing-place under the willow-tree, where she also had seen the boat lying moored among the stakes.

A sure touch of her old practised hand, a sure step of her old practised foot, a sure light balance of her body, and she was in the boat. A quick glance of her practised eye showed her, even through the deep dark shadow, the sculls in a rack against the red-brick garden-wall. Another moment, and she had cast off (taking the line with her), and the boat had shot out into moonlight, and she was rowing down the stream as never other woman rowed on English water. (*OMF* Bk. IV, chap 6)

川の恵みで育ち、父親と一緒に舟の漕ぎ方や流れを読み取る仕事をしていたお陰で、Lizzie は、この後女性の身ながら、独力で奇跡的に Eugene を救出することが出来る。彼女は、昔身につけた技をついによいことの為に用いることが出来た事を神に感謝するのである。

III

社会のなかでアイデンティティを見出しえず、親と疎遠になり、アンニュイのうちに生きているのは、Eugene Wrayburn だけではない。ディケンズの作品には、彼の同類が何人か登場する。*Little Dorrit* の Arthur Clennam も意志の力を欠いている。彼は “it might be better to flow away monotonously, like the river” (Bk I, chap 16)、つまり眼前の川の如く単調に生きたいと願い、苦楽に対して無感覚であつたらよいと思う。川は、彼に、苦痛からも幸福からも解放され、有限の時を生きる煩悩の徒であるよりも、悠久の時の流れに身を委ねるのがよいのではないかと示唆しているようである。しかし、これは一時的な瞑想であつて、永続的なものではなく、彼は現世の時を生きていかなければならない。

David Copperfield 中の James Steerforth もやはりアイデンティティを見い出せずにいる。彼は、活力がない訳ではないが、その向けるべき対象を見つける事が出来ず、Emily という女性を誘惑し捨ててしまう問題児である。この Emily を匿ってくれるのが、やはり不幸な境遇の女 Martha Endell である。ロンドンで身よりのない女性がつく職業は決まっていた。彼女は疲れ果て、テムズ河に飛び込もうとしているところを、行方不明の Emily を探しにきた Daniel Peggoty と David に止められる。Martha は、川とともに流れ海に流れていきたいと思う。海は彼女の死を引き受ける墓場である。川は絶望し疲弊した女を永遠の休息の場に運び去ってくれる。彼女は川は自分の境遇に似ているという。始めは何の悪も知らず、田舎から都会に流れてきて汚れ、海にたどり着く。彼女が狂乱のうちに吐き

出す言葉を David と共に聞いて見よう。

‘Oh, the river!’ she cried passionately. ‘Oh, the river!’

‘Hush, hush!’ said I. ‘Calm yourself.’

But she still repeated the same words, continually exclaiming, ‘Oh, the river!’ over and over again.

‘I know it’s like me!’ she exclaimed. ‘I now that I belong to it. I know that it’s the natural company of such as I am! It comes from country places, where there was once no harm in it—and it creeps through the dismal streets, defiled and miserable—and it goes away, like my life, to a great sea, that is always troubled—and I feel that I must go with it!’

I have never known what despair was, except in the tone of those words.

‘I can’t keep away from it. I can’t forget it. It haunts me day and night. It’s the only thing in all the world that I am fit for, or that’s fit for me. Oh, the dreadful river!’ (*David Copperfield* chap. 46)

これと似た絶望してテムズ河に身投げする売春婦を、Thomas Hood がその詩 “The Bridge of Sighs” で扱っている。これは現実の事件を元にしてしているそうである。⁽¹⁰⁾ メアリー・ファーリーという女が、私生児を抱いてリージェント運河に飛び込み自殺を図ったが果たさず、子供だけが死んだ。Hood は舞台を当時自殺の名所であったウォータールー橋に移し、生きることに疲れ死に急ぐ薄幸な女を、哀れみと冷徹さをもって描いた。身よりもなく帰るべき家もない女は、思いきって飛び込む。

In she plunged boldly,
No matter how coldly
The rough river ran,
Over the brink of it,—
Picture it, think of it,
Dissolute Man!

Take her up tenderly,
Lift her with care;
Fashion’d so slenderly,
Young, and so fair!

彼女の弱さ、邪悪なところは大目に見、罪は神に委ねよ、と彼女に対する理解を示してこの詩は終る。

Owning her weakness,
 Her evil behaviour,
 And leaving, with meekness,
 Her sins to her Saviour.

ヴィクトリア朝の繁栄の陰で路地にひっそりと暮らす不幸な女たちが同時にいたのである。川はこういった女たちの苦痛を終わらせてくれる破壊の川である。

IV

暗く悲惨な物語が続いたが、話を『互いの友』に戻そう。Lizzie に救われた Eugene は回復に向かう。一方、正体を現わし放浪人生をやめた John Harmon は精神的成長を遂げた Bella Wilfer と目出度く結婚することになる。テムズ河は Greenwich で二人の marriage-feast に臨み、そのご馳走は結婚に彩りを添える象徴的な虹色に輝く魚である。

What a dinner! Specimens of all the fishes that swim in the sea, surely had swum their way to it, and if samples of the fishes of divers colours that made a speech in the Arabian Nights (quite a ministerial explanation in respect of cloudiness), and then jumped out of the frying-pan, were not to be recognized, it was only because they had all become of one hue by being cooked in batter among the whitebait. And the dishes being seasoned with Bliss--an article which they are sometimes out of at Greenwich--were of perfect flavour, and the golden drinks had been bottled in the golden age and hoarding up their sparkles ever since. (*OMF* Bk. IV, chap. 4)

ちなみに、ここは「しらす」で有名な料亭で、夏になると、当時、しらすを食べ、夕涼みをする憩いの場となっていた。Dickens はこの作品のなかでは建物をはっきり書かないのであるが、珍しく、Ship Tavern をモデルとするこの料亭だけはそれと分かるように描写している。またこの場所はかつて Bella と父親（彼女は 'Pa' と呼んでいる）が冗談めかして、まるで恋人同志のように elope してやってきたところでもある 3 巻 8 章の Bella と Pa の場面と、この結婚の宴のある 4 巻 4 章の場面は、血生臭い殺伐とした埃っぽい作品全体を覆う雰囲気の中で、場違いなほどに、楽しく、明るい。結婚の宴であるのだから当然といってしまうまでもであるが、この料亭は、Dickens と彼の友人たちが実際晩にテムズ河を下ってよくしらす料理を楽しんだところであり、そういったことも作品に反映しているであろう。

しかし、更にこの料亭での夕食の場面の醸し出す楽しい雰囲気を解く鍵は、Dickens と若い女優

Ellen Ternan との関係にありそうだと考えるのは、荒唐無稽ではあるまい。Dickens が、Bella に Ellen の姿をダブらせたとしても無理はない。父親 Pa の年齢は Bella の倍ほどで、Dickens と Ellen Ternan との間の年齢差くらいであろう。Dickens が見果てぬ夢を見たからといって無理からぬことである。⁽¹¹⁾ Pa と Bella との楽しい冗談めいた逃避行から一部を紹介しよう。川下りと川を臨んでの夕食の楽しい様子が描写されている。

The little expedition down the river was delightful, and the little room overlooking the river into which they were shown for dinner was delightful. Everything was delightful. The park was delightful, the punch was delightful, the dishes of fish were delightful, the wine was delightful. Bella was more delightful than any other item in the festival; drawing Pa out in the gayest manner ; making a point of always mentioning herself as the lovely woman; stimulating Pa to order things, by declaring that the lovely woman insisted on being treated with them; and in short causing Pa to be quite enraptured with the consideration that he was the Pa of such a charming daughter. (*OMF* Bk. II, chap. 8)

一度は死んだと思われた男 John Harmon も、仮死状態から蘇った男 Eugene Wrayburn も、それぞれ配偶者を見つけ、新たな未来に向かっていく。都市ロンドンで再生の道を歩む者がいる反面、Betty Higden のように、老いて「救貧院」の様な施設に収容されることを極端に恐れ、テムズ河の上流まで逃げ、Henley-on-Thames の 1 マイルくらい上流⁽¹²⁾ で死ぬ人物もいる。この辺は、まだテムズ河も清く流れ下流のように汚れてはいず、あたかも清く正しい孤高な彼女の生き方を象徴しているかのようである。

In those pleasant little towns on Thames, you may hear the fall of the water over the weirs, or even, in still weather, the rustle of the rushes; and from the bridge you may see the young river, dimpled like a young child, playfully gliding away among the trees, unpolluted by the defilements that lie in wait for it on its course, and as yet out of hearing of the deep summons of the sea. (*OMF* Bk. III, chap. 8)

そこにたまたま Lizzie がいてこの世における彼女の最後を看取る。Lizzie は誰の力も借りず、必死で生きて哀れな孤独の死を迎えた老婆の最後の救いとなる。このようにテムズ河は様々な人々の死を呑込み、又、川沿いで果てた人々の死を見つめながら流れ続ける。『互いの友』において、登場人物と同じくらい、否それ以上に重要な役割を果たしたのが、このテムズ河であったといえよう。死と復活の象徴的な意味を帯びながら、流れていたのである。

V

『互いの友』以外の彼の作品においても、ディケンズはテムズ河をしばしば登場させている。*Oliver Twist*, *The Curiosity Shop*, *Martin Chuzzlewit*, *David Copperfield*, *Little Dorrit*, *Great Expectations*, それに *The Mystery of Edwin Drood* などである。

Great Expectations においては、テムズ河は、冒頭の場面では、遠景として登場し、最後の方では Pip とその友人 Herbert が、結局失敗するのであるが、Magwitch を国外に逃亡させるのに、一役買おうとする。Michael and Mollie Hardwick が、川はディケンズの作品における“principal actors”⁽¹³⁾ であると指摘している通り、テムズ河は最早背景や遠景ではなく、重要な役割を果たす主要な登場人物となっている。いわば、Pip たちとの共謀者といった役所である。デイビッド・リーン監督の映画『大いなる遺産』も、テムズ河上のスリリングで劇的な大立ち回りの場面が圧巻である。ディケンズは、この場面の資料を集めるため steamer をチャーターし、⁽¹⁴⁾ 川の様子をつぶさに観察したという。

Oliver Twist では、テムズ河は、ロンドン橋の傍らを陰うつに流れながら、Oliver を救ってやろうと売春婦 Nancy がこっそりとする話 やがてこれがばれて彼女の死につながる一を、まるで重要な一登場人物であるかのように聞いている。この場所は彼女にちなんで Nancy's steps と呼ばれている。同じ作品中で、この Nancy を殺害する悪漢 Bill Sikes の死に場所 Jacob's Island はロンドン橋より下流にある。

Martin Chuzzlewit では、テムズ河は、Jonas Chuzzlewit が殺害した Tigg Montague の血に汚れた衣服を受け取る。*The Curiosity Shop* では、ヒロインの Nell につきまとう、グロテスクな小男 Quilp の家と船着き場も、ロンドン橋下流のロンドン塔近辺にあり、テムズ河は、彼の溺死を暗示するかのようによろしく流れている。

どうやら殺伐とした陰惨な場面ばかり例示したようだ。最後に明るく楽しい前向きな場面も挙げておこう。前述したように『互いの友』においては、テムズ河は、グリニッジで、Bella Wilfer と John Harmon のほんのささやかな結婚の宴に臨席しているかに見える。またディケンズの遺作となった未完の小説 *The Mystery of Edwin Drood* では、テムズ河は、舟の中の Rosa Bud と Tartar を牧歌的な雰囲気の中で幸福へと運んでいく。

William Morris (1834-96) が、汚れた喧騒の都市ロンドンに反発し、テムズ河上流の田舎の町 Kelmscot に理想郷を求めたのに対し、ディケンズの主たる舞台はロンドンの真ん中から海に近いところである。テムズ河は常に海（死）に向かって流れて行く、金銭欲にまみれた人間や生活に疲れた人間を呑込む破壊や破滅を象徴する川であると同時に、再生・復活・蘇りや救済・償いの川でもあり、喪失していたアイデンティティを回復させる川でもある。繰り返しになるが、ディケンズの作品を語るにはテムズ河とロンドンという都市抜きには語れない。

注

本文中のディケンズの作品の引用はすべて *The Oxford Illustrated Dickens* から。

- (1) Michael & Mollie Hardwick, *Dickens's England* (London: J.M.Dent & Sons Ltd, 1970), p.141.
- (2) H.M.Daleski, *Dickens and the Art of Analogy* (London: Faber and Faber, 1970), p.271.
- (3) ガヴィン・ウエイトマン 『図説 テムズ河物語』(植松靖夫訳、東洋書林、1996)、82頁。
- (4) 「さらい屋」の記述については、小池滋『ロンドン—ほんの百年前の物語』(中央公論社、1978) 180-84頁、松村昌家『ディケンズとロンドン』(研究社、1981) 192-94頁を参考にした。
- (5) 小池、前掲書、184-85頁、松村、前掲書、192-9頁参照。
- (6) 新野緑『小説の迷宮—ディケンズ後期小説を読む』(研究社、2002) 364-369頁参照。
- (7) 新野、前掲書、366頁。
- (8) Edgar Johnson, *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph* (2 vols., New York, 1952), p.1044.
- (9) *ibid.*
- (10) 小池、前掲書、214-16頁参照。
- (11) See Hardwick, p.145.
- (12) See Hardwick, p.143.
- (13) Hardwick, p.3.
- (14) See Hardwick, p.137.